

## 配合飼料をめぐる情勢について

平成 26 年 11 月 28 日  
臨時委員 山内 孝史

### ○10 月 8 日 第 6 回畜産部会における石澤委員のご発言

問:平成 26 年 10-12 月期の配合飼料価格は、当初はかなり下がる予想が出ていたが、結果的に▲2,650 円という数字が出た。円安に傾いたからだという話だが、円安に傾いたのは最近であって、実はその前に原料穀物は買っているのではないか。生産者にはそのような疑心暗鬼がある。ご見解をお聞かせ願いたい。

どのような形でエサを在庫して、価格を決めているのか、もっと分かりやすくしていただくと、生産者の理解も深まる。

答

#### 1. 四半期ごとの配合飼料価格改定について

・通常補填基金、異常補填基金という2階建て方式の配合飼料価格安定制度が始まって以来、配合飼料の価格改定は四半期ごとに行われている。  
・その際、価格改定の積算上の根拠としているのは、主原料価格(とうもろこし、マイロ)、副原料価格(大豆かす、菜種かす)、海上運賃、外国為替相場である。

・次四半期の価格改定額(値上額または値下額)は、その3週間~1週間程度前に前述の4項目のデータを基本に決められる。

・10-12 月期については、当社を例にとると次のような考え方をした。

- ① 原料全体の 5 割弱を占めるととうもろこしのシカゴ相場は、史上最高の豊作見込みから、ブッシェル当たり 3 ドル台前半まで軟化。  
一方、世界的な米国穀物への需要の回帰から、輸出エレベーターコストや内陸産地からの輸送運賃などが上昇。
- ② 原料の 12~13%程度を占める大豆かすも米国産大豆の豊作見通しから相場が下落。
- ③ 海上運賃は、北米産新穀の輸出需要の増加見込みなどから上昇に転じている。
- ④ 外国為替相場は、米国の金融緩和策の縮小及び早期利上げ観測から円安に振れている。(価格改定判断時点で、1ドル=108 円前後)

以上の状況から、とうもろこし、大豆かす等の原産地価格の「下げ」の要素が大きく影響し、配合飼料価格(全畜種加重平均)は値下げを発表した。

## 2. 平成 26 年 10-12 月期の主原料とうもろこしの買付例

主たる飼料原料であるとうもろこしの買付は、以下に示した通り、10-12 月使用を例にした場合、8 月から 10 月に 90%以上の買付を終了している。その場合、7-9 月に比べて 10-12 月使用時の場合の方が為替は、約 6 円円安となっている。



	7-9 月使用原料	10-12 月使用原料
原料の購入時期	5-7 月	8-10 月
為替	102 円.	108 円

(参考)別添:2014 年対米ドル為替相場(円/ドル)の推移

## 3. 原料在庫、製品在庫について

### (1)原料在庫は極力抱えない

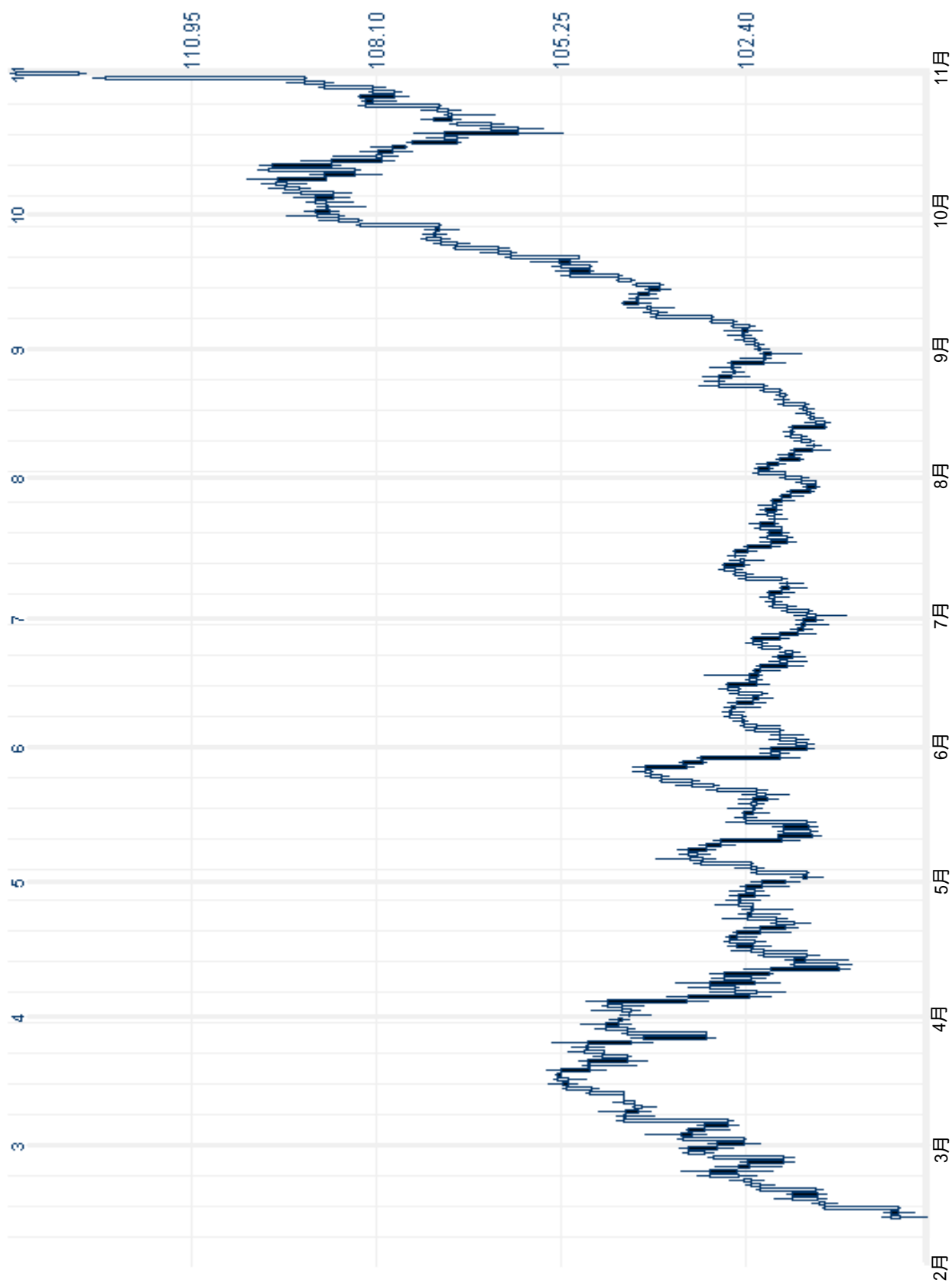
- ・飼料メーカーは配合飼料の原料となる飼料穀物等について、原産国での積載時期、日本への到着時期、工場での加工時期等を勘案して、必要量だけ輸入商社から買い入れる契約を行う。

### (2)製品在庫も最低限

- ・飼料原料だけでなく、通常、製品となった配合飼料についても、最低限の在庫しか持たない。

(参考)

2014年2月～11月対米ドル為替相場(円/ドル)の推移



出典:金融機関データベースより